

『現代人間学・人間存在論研究』第二号のための序

著者	上柿 崇英
引用	現代人間学・人間存在論研究. 2017, 1 (2), p.5-6
URL	http://hdl.handle.net/10466/16205

『現代人間学・人間存在論研究』第二号のための序

“人間の学”としての新たな人間学を希求する本誌では、前号において、まず、われわれはいかなる時代を生きているのかという問題について焦点をあててきた。人間を問うというわれわれの営為は、根源的にはそれを問うものが生きる時代の性格と不可分の関係にある。それゆえそれぞれの筆者が、いかなる社会的、時代的要請のもとで人間を問おうとしているのか、そのことを明らかにするのが前号の目的であった。

本号では、それを受けて、それぞれの筆者が、それぞれの形で人間を説明するための新たな理論的枠組みを導入し、展開する。すなわち新たな人間学を構想するにあたって、人間をいかなる形で定義できるのかについて、それぞれが〈思想〉的実践を試みるのである。人間を定義するということ、それは人間学の理論的な核心部分に他ならない。そのため本誌では、この問題を本号と次号の二回にわたって詳細に検討していく。とりわけ本号においては、「人間をふちどること」を全体の主題とした。それは人間存在を形作る輪郭を明らかにすることによって、その存在としての核心部分を浮き彫りにしていく試みに他ならない。人間存在が成立するためには、それをふちどる、外界との連関が不可欠である。それを仮に〈環境〉と呼ぶのだとすれば、そこには物質的な世界との連関と同時に、決して物

質には還元できない世界との連関があるだろう。そして現在の世界との連関と同時に、過去や未来の世界との連関があるはずである。

したがって、それぞれの執筆者には、こうした“連関”をいかなる原理のもとで描きだすのかということが問われる。われわれはこれまで、いかにして“存在”してきたのか。そしてこれから、いかなる形で“存在”しようとしているのか。そうした問いに答えることによってはじめて、われわれは十全な人間の再定義へと進むことができるだろう。

『現代人間学・人間存在論研究』第二号

編集代表 上柿崇英